

サロン・あべの

<サロン・あべの> NO. 21 昭和63年 3月19日(土) 発行

<サロン・あべの> 2月の出会い

昭和63年2月20日

車イスが見た 韓国 ハワイ

まだまだ、社会的経験の乏しい障害者が外国へ出て、いろんな人と交流をもち、いろんな体験をする。こんなすばらしいことはありません。昨年十一月に韓国 今年一月にハワイへと続けざまに行ってこられた南光龍平氏と、この二つの旅行を企画された井上憲一氏に、車イスを通してみた両国の様子はもとより、旅行のイロハから奥義までたっぷりとうかがいました。

■車イスで行くツアー

——まずは仕掛け人・井上さんから今回の経緯を…

セルフ社が発足して十五年、印刷一筋に今日までやって来てなんとか安定して参りました。そこで、次のステップとしてトラベルコンダクターの仕事を企画。経営の多角化を考えていた矢先に、ある旅行社の人からツアーの話が来て、トラベルコンダクターとしての初仕事、今回の韓国とハワイ行となったのです。既販されているパック旅行では、車イス障害者は介助者の有無

に關係なく参加できないのが現状なのです。往復だけが団体で現地自由行動というパックでも駄目なのです。それなら、電動車イスやストレッチャーでも行けるツアーを組んだら…ということ、で今回の実現したのです。

■出発まで

——いちばん気になる費用のことですが 韓国が三泊四日で七八〇〇〇円。ハワイが四泊六日一八九〇〇〇円でした。この費用は、渡航費用・ホテル代・食事一回・ビザの手続費用が含まれてのもので、小遣い別ですよ。小遣いは、個人差があります。このときとばかり三〇〇〇ドルの指輪を買った人もあれば、一〇〇万円遣った人、酒三本・タバコ二カートンだけの人といろいろです。

——パスポートの手続は

障害の軽重に關係なく旅券事務所の窓口へ本人が出向かないと駄目です。字の書けない人のサインは、三等親までの代筆が認

められています。

韓国は、今回、大韓航空機事件直後だったのでビザ取得にはきびしかったですが、領事館も比較的好意的でした。逆に想像に反してアメリカの場合、障害者の出入国はきびしく、こまかいところまでチェックされるんですよ。

■飛行機では貨物扱いの車イス

——車イスは搭乗の時 どうするんですか
空港にもありますし、機内用の車イスは別にあります。それに乗りかえるんです。それが、また小さいんです。キュークツですね、まいました。自分たちの荷物扱いですよ。ボンボン貨物室へほうり込んでます。それも搭乗台数に制限があります。D C10が五台、ジャンボが八台と機種によってちがいます。

——電動はきびしい制約があると聞きました
たが

航空法もあってバッテリーは危険物扱いです。日本の航空会社の場合は、クルー特に機長の権限でままるようですが、バッテリーだけクーラーボックスに梱包して乗

せるんです。



奥さんにないしょで、もう一度逢いたい人

■人があたたかい韓国

——韓国の様子、お気づきになったことを
平和の顔と戦時下の顔が同居している感じで、写真の撮影はむやみやたらに出来な
いんです。とくに飛行場、鳥瞰図的なアング
ルで撮る風景、オリンピックスタジアムの
ロイヤルボックスなどは許可がいるんです。
街なかの横断歩道はシエルターの役目を
果たしているので地下にもぐっており、障
害者にとっては動きづらいところです。

障害者を街なかでみかけないのは、あながち街の事情ばかりとはいえない面もあり



キムチ買いそこねた、幻の南大門市場

ます。障害者をもつ家族は恥ずかしいという意識が根底にあって、かくそう、かくそうとする気持がわざわいしているように思えました。自然、障害者は家の中にこもり家族内での介助がなされているようです。ただ職業訓練校やスポーツセンター（パラリンピックの選手強化中）など施設内では非常にイキイキとした姿をみました。障害者にとつての交通事情の悪さに加え、てまいったのはタクシードライバー。タクシードライバーは運転手の思う行先でないと乗せてくれないんですよ。いたるところ段差はあるし不便ですが、人の心はあたたかいです。障害者に対する態度が自然なんです。うん、忘れ

られない人がいる。焼肉屋さんのウエイレス。この人の気くばりはすばらしかったです。もう一度逢いたいなあ。

残念だったのは、大阪でいえば黒門市場のような南大門市場へ行くのを人出が多く危険という理由で止められて実現しなかったことです。帰国後わかったのですが、大阪のキタやミナミになれている私には、行けないような混雑ではなかったのです。おいしいキムチを買いそこねました。

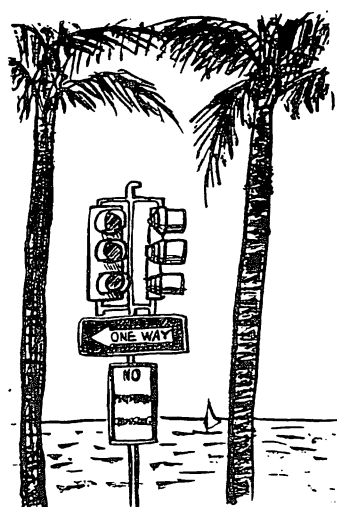
——南光さん ヤオヤしたとか

あゝ、一本二万円もする度の強いのを飲んで寝たのはいゝんですが気がついたらベッドの下で昨夜食べたものにくるまってました。とんだ失態です。

■ハワイよいとこ 一度はおいで

——つぎにハワイは

丁度 行った日はめったに降らない大雨の後でいゝ天気でした。日中は二五〜六度。夕方は日本の秋を感じさせる絶好の気候。体調はよくなり、体が軽快になるので、この地でプロ野球がキャンプを張る理由がわかります。



信号の变りが早く、命がけの横断

街のいたるところで車イス障害者に出会いました。歩道もそれに段差がなくしてあるのでスイスイいけるんです。見知らぬ人が気軽にトイレ介助を申し出てくれたりして、すごくあたたかいです。視線を感じませんしね。日本では考えられないことでした。ホテルもワンフロア全部障害者用客室に設備されていて快適でしたが、便座が高いのとドアの開閉の重さには閉口しました。

いまひとつ、島内観光を満喫できたのは、タクシーがあります。車イスが六台一度に積めるハンディーキャブを六〜七台もって、営業する民間のタクシー会社があるんです。一日借り切って一〇ドル。もちろん無料の公的な車イス専用タクシーもある

りますがね。大阪にも車イス用のリフト付タクシーはあるが、この会社のようにこれだけで営業して経営がなりたっていると聞いて、いかに積極的に障害者が動いているか改めて感心しました。

もうひとつ、横断歩道の信号の早いこと。命がけですよ。日本のように歩行者優先で、止ってくれないんです。車も人も平等。自分も自分で守るという意識が徹底しているのにも感心しました。面白いのは、車イスに武田信玄のようなのぼりを立てる、ままりになっっているらしいのですが、その勇姿にはひとりも会いませんでした。恥すかしいのでしょうかね。

■心憎い仕掛け

——井上さん、このハワイ旅行には心憎い仕掛けがあったとか

ええ、現地につくまで同行者に知らせていなかったことがあるんです。上平氏と南光氏 両夫妻の結婚式をポリネシア文化センター内のチャペルで挙げるいうことを仕組んだんです。本人たちは、びっくりするやら感激するやら……

■車イスひとり旅 ハワイはOK

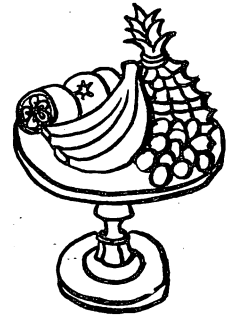
—車イスのひとり旅は

ハワイは行けます。道路事情もいゝし、設備にしてもいゝ、ホテルもいゝ。障害者に対する接し方もごく自然で気軽に介助してくれるので快適な旅ができます。韓国も親切なのですが、なにせ交通機関と道路がネックですね。香港 マニラ シンガポールなども道がねえ…。おまけにスラム街が隣接していますので要注意です。

■ボランティア やゝい!

—今回のご苦労は

ボランティアをさがすのに大へんでした。マンツーマンが理想ですからね。新聞に出



したり知人にたのんだりしてやっとなさ。添乗員も頭数に入れての話ですよ。これからもボランティアを集めるのに相当のエネルギーが費やされるでしょうな。

サロン・あべの二月の出会いにいられた三二名の方々は、韓国・ハワイの話にうっとりしたり、勇気に感心したり、人のふれあいの温かさにうなずきあったり、あっという間の三時間を過ごしました。

(進行 石田 律氏)

サロン・あべの2月例会の南光氏の話聞いて、馬越郁栄さんはつぎのような感想を寄せられました。

感想文



馬越郁栄

私は、冨田様よりお知らせを頂き2月20日午後1時より開かれたサロンの会に柿岡ご夫妻に連れて行って頂く。多くの障害者の方、また ボランティアの方が会場いっぱいいらっやって とても盛会である。サロンに伺ったのは今回が2度目、今年のはじめて新年会に参加させて頂き、石田様、冨田様、小嶺様の奥様、また、私達の茶道教室の指導をなさっている網谷先生、阪田様、また他にも知った方のお声を聞き、とても懐かしく、嬉しく思う。

当日は、言語発言に障害をもっていらしゃる南光さんを、同じ会社の井上様ご紹介される。南光さんは、ハワイとか韓国においでになったようで、いろいろとご体験なされたことを(石田様、井上様のご助言もありましたが…)一生懸命お話をなさる。

私も少しでも、解ろうと必死で聞かせて頂きました。お写真等も廻されて来ましたが、視力障害の私は、とても残念に思いました。

また、南光さんは、ハワイの特別の会場でご結婚式を挙げられたとのこと。ほんとうにご当人のほほえましいご様子を想像し、ほんとうに素晴らしかったと、胸が熱くなるようです。ほんとうにおめでとうございます。お二人の前途に幸多きことを祈ります。

奥様の明るいきはきとしたお言葉を聞き、障害の箇所は違っても、社会参加と平等をといわれておりますように職業の上に、またボランティアの方、住いの隣人、家族、友人等のコミュニケーションを深くし、家庭にあっても共に助け合って、有意義な人生を前向きで取り組んでゆかなければならないと、自ら覚悟を新たに帰路についた。

(墨字訳=石田 律)

経済的に豊かな人を、人はうらやむことが多い。ふつう、経済的に豊かな人は「有名」でもある。しかし、経済的に貧しい人の存在は知られることが少ない。貧しい人はどこにでもたくさんいるのだが、その生活に関心をもつ人はほとんどいない。

逆に心の貧しい人については、人は多くの関心をもつ。心の貧しい人の悪口を言ってみたり非難してみたり、時にはうらやんでみたりする。その代わり、心の豊かな人のことは不思議なほど話題にならない。おそらく心の豊かな人は、ぼくたちの身のまわりにもたくさんいるはずなのだが、その存在にぼくたちが気づくのは希なのだ。

つい半世紀ほど前までは、経済的に貧しいことは、その人本人の「罪」であった。人はコジギをしているだけで、ムチを打たれ、牢獄に入れられたのである。しかし、現代では、経済的な貧しさをそのままその人の貧しさであると考え、人は、確かに減ってきたと思う。

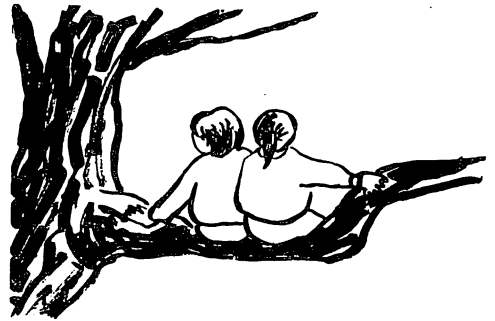
では、心の貧しさについてはどうだろう。「人間の値打ちは地位や名譽や容姿ではなく、その心だ」と言う人がまだまだ多い。「心」が人間の値打ちを決めるのだろうか。心の美しい人は美しい人間なのだろうか。心の豊かな人は豊かな人間であると言えるのだろうか。

疑いもなく、ぼく自身はそう思っていない

心の貧しきについて

た。つい最近まで、心の豊かさ、心の美しさが人間の値打ちを決めるのだと信じていたのである。

しかし、心の貧しい人たちが、その貧しい心の中、どれほどがき、あがいているかを見ることがあり、ぼくの人間観は変わってしまったのだ。心の貧しい人は、孤独のなかで、つくり笑いをしていたのである。そして、心の豊かな人なら悩みそうもないことを悩み、苦しむはずのないことの苦しんでいる。その心の、のろろとした、ためらいがち、しかも絶えず緊張している歩みの足あとをたどると、深く心を打たれる。何かをつかもうと必死なのだろう。



うか。他者の苦しみにかかわるのを恐れ、自分の心を開くことを恐れ、巨大な疑問の重みに押しつぶされそうになりながら、ようやく歩いていくのである。

その苦しみは何のためなのだろう。心の豊かな人から見れば、まことに愚かしい無意味な恐れであり苦悩ではある。しかし、そこには確かに胸を打つものがある。何か言葉を選ぶことを許さないような、何かがあるような、気がするのである。心の貧しさを人間としての貧しさと考えるのは、果たしてどうだろうと思いはじめたのである。

(知)

自立

(5)

結婚は社会人としての大きな責任と、夫は妻がいることに安らぎを、妻は夫がいることに心の安堵を得る、ことを基礎に「狭いながらも楽しい我が家」を築いておられる南光仁子さんは……

「言葉の代りになって……」

「ええよ」

南光仁子

私の結婚について、書いて欲しいと頼まれ、さて何をどのように書けばよいのかしら……と悩んでしまいました。

私は、今まで結婚なんかしなくても、友達が多くいてくれたらそれだけでよい。でも、親・姉・兄達の負担にはなりたくないから、なんとか独立して暮せたら……なんて考えて、一人暮らしを始めた訳ですが今か

ら思うと自分の頼りなさや、努力をしなればならない事(しんどさ)を身体的な障害のせいにしており、自分自身の魅力の無さや醜さに気がつかない最もダメ人間だったように思います。

人間は、男・女の二種類。恋して、愛する。これは、最も自然のものだと思つてゐる。人間は、異性を愛するように出来てゐるのだと思います。醜い体をしているから愛されないとか、「無い無い」事ばかり見付けるのがうまくなりがちでしたが、いつからか、「やろう、やろう」の心が芽を出したことに気が付き、重ねてその時「電動車イス」という本当にありがたい足が私に

プレゼントされたのです。「よおし、これで学校へ行ける。」そう思うと、もう、そのことにまっしぐら。年齢の事は、頭から消えています。あれやこれやと、電動車イスは、ふる回転。

私が高等部に入学したのは、昭和五五年四月八日のことでした。あこがれの学生生活なので、学友達は皆さん私の年齢の半分位の子供。先生はほとんど若者です。それでも、皆さんと勉強出来て、今迄知らなかった事を教えてもらえ、私の最大の楽しみにになりました。良い点を取ろうとか、そんな考えは、全く思っていないのでした。でも、〇点だけは逃れたかったので、試験の度、ビクビク。後は、独立した時困らないように社会科なんか、楽しみにやっていたように思います。何とか高校三年間、悩んだり、苦しんだり、楽しんだりして卒業出来ました。

さて、独立する第一歩として、進路はどうするか、とにかく家族に安心してもらえて家を出る事。それに今迄から和文タイプを習いたかったので、訓練校への道を選び、どうにか入校出来ました。寮生活一年、これも又、種々な事で、悩みもりましたが、



友達とは楽しく過ごしました。卒業が近づいて来たある日、近くの病院のロビーで現在の夫である南光龍平と再会したのです。

その年は、大阪では珍しくよく雪が降る一月でした。その朝も雪が降っていた気がします。私が、南光龍平さんと知り合ったのは、今から一八、九年前になるでしょうか。堺の府立福祉センターで機能訓練所に入所した時でした。彼は、まだ一八才だと聞いていましたが、顔はといえは、何とオッサンです。難しい顔をしていましたが、いつも何か役員をしていて寮生会が開かれる度、議長を務めて、皆さんの話をよく聞いて取りまとめる。若いわりには心豊でホ

ットな人間性を持ち合せた好青年に見えました。それが、同じ仲間として種々な行事をしていた頃の印象でした。その頃の私は、二〇年間という長い冬眠から目ざめて、初めて見る社会という海に放された魚の様でした。うまく泳ぐことを知らないし、まだまだ夢ばかり追いつけていましたので、今の彼との結婚生活など全く夢にも思わなかったことでした。その内、私も彼も訓練所を退所して、それぞれが互いの道に進みましました。それ以来の再会が病院のロビーのことでした。出会う迄どうしているのかさえ知らなかったのです。私のイメージでは、かなり言語障害はあるが、あの一八才の頃の好青年の南光龍平君だけしかありませんでした。でも、今度は、本当にかんりのオッサンで、おまけに車イスに乗っていましたのでビックリするやら、なつかしいやら。

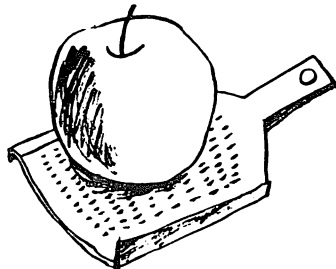
「やあ、南光君」

「あゝ、阪本さん」

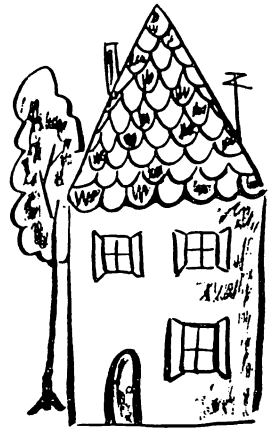
「私、授業中なんやけど、ちょっと診察に来させてもらてん。急がへんかったら、ちょっと待っててくれる。」彼が何と言ったか記憶にないけれど、私が診察を終えて出て来たらちゃんと待っていてくれました。

「教室へ帰るの、少し位遅くなってもええな。コーヒー飲んで行こうかあ。ほんまに久しぶりやなあ」そんなこんなで、種々話しをして彼の生活ぶりも解りました。

その頃の私は、職業訓練校の卒業を目前にして、堺市旭ヶ丘に小さなアパートを借りていました。それから後、彼は、よくアパートに遊びに来るようになり付き合いが始まりました。



その時でもまだ、彼との結婚なんて夢にも考えていませんでした。五九年四月頃かなあ、御陵の桜が満開のある日、二人で花見としゃれこんだことがありました。公園へ行ったりして、割合ゆっくり話すことが出来ました。中島みゆきとか、岩崎宏美の話もしましたが、なんとなく彼の気持が私に向いているように感じました。



たぶんその時、彼は、心のどこかで私と一緒に生活出来たら良いなあと、思ったのかなあと今でも私うぬぼれています。

私は、結婚のこと考えなかったけど、彼は、父親と二人暮らしと聞いていました。お姉さんが一人おられるけれど結婚をして大阪には、住んでおられなかったのです。お母さんは、彼が一八才の頃、ちょうど私と知り会った年の六月に若くして亡くなられたそうです。ですから、いつも寂しいだらな、男だから元気だけれど心のどこかで寂しいだらなあと、いつも思っています。だから、彼の帰りを待っていて「お帰り」と大きな声で迎えてあげられたら、いいのにと、ふと思ったことがあります。

でも、そんなこと私でなくっても良い訳です。それに、まだまだ夢の多い人でしたので、健全者の友達も多くいた私は、母親

からも「一人で暮しても良いから、せめて実家の近くで住んで欲しい」と強く言われていましたし、八尾には、友達が多くいましたので八尾へと心が動き、小さな家を借りて一人暮らしをすることになりました。

八尾には「シェークハンド」というボランティアサークルがあり、その仲間の人達が本当にたくさん楽しい思い出を私に残して下さったのです。そんな人達とすぐ逢える八尾に、私は、彼に黙って帰ってしまったのです。けれど、八尾に帰ったことが彼との結婚を決意する大きな原因になったのです。彼はと言えば、八尾に帰ってしまったので、たぶん一緒に暮らすことなど、もう出来ないだろうと思ったそうです。

私は、その頃「わだち」と言う作業所で仲間何人かで働いていました。

「わだち」は、出来たばかりで困難なことだらけでしたので、どうしたら良いのか彼によく相談をしました。ある日、彼ともう一人の友達と映画を観に行きました。たしか、「植村直巳物語」でした。映画を観ている途中、なぜか「私、結婚出来るんどこうかなあ」とそんなことを考えました。南光君と?...

彼はどう思ったのでしょうか?...

その後、彼が電話でついに言ったのです。「ボクの言葉の代りになって欲しい。一緒に生きていきましょう。」ですって! 私は「ええよ」と言った気がします。

けれど、それから先が困難の絶え間なかったのです。彼の父親の大反対、これを説得することの大変なこと。私の母・姉・兄の反対、これも説得することの大変なこと。言うに言えない苦勞の末に、私の家族に理解をもらうことが出来ました。そして、彼のお姉さんにも理解してもらうことが出来たのですが、かなりの難物は彼の父親です。まったく、彼の結婚については、聞く耳を持ってくれなかったのです。

けれど、彼は、あせらずゆっくりと父を説得にかかりました。が、どんな彼の言葉も通じず、とうとう結婚式にさえ彼の父は出席せず、たった一人のお姉さんにさえ彼の晴れ姿を見てもらうことが出来なかったのです。したがって、全てを南光さんに合わす形となり、私の母も結婚式には出ませんでした。だけど、私の姉達だけは、心よく出席してくれました。私は、せめて亡き父だけにでも晴れ姿を見てもらいたいと、

父の眠る地で結婚式を挙げました。

少しずつ、少しずつ荷物を運んだ彼。春と云うのに長いコートを着込んで、車イス一杯に物を詰め込んで来た姿は、何とも忘れられない思い出です。

そうして始めた私達の新婚生活も早いもので、もうすぐ一年が来ようとしています。「狭いながらも楽しい我が家」とは、本当にこのことだと思ふ毎日です。彼の父も今では、二人のことをとって喜んで下さり、離れた所から見下さっています。

今の「狭いながらも楽しい我が家」とは義父が私達二人に贈ってくれた言葉です。

私がいつの日にか、フツと思つたこと、そう彼の帰りを食事の用意をして、明るい家に「おかえり」と大きな声で迎えられたらと……今そのまま、現在の私の毎日です。結婚ということは、人それぞれの考え方の違いもあるけれど、私は、社会人としての大きな責任と、夫は妻がいることに安堵を感じ、妻は夫がいることに心の安堵を得る。そういうことを基礎にしていればたとえ夫婦喧嘩をしたとしても、心豊かな人間性が築かれ、本当の明るい家庭が生れると信じています。

THE DEAF MUTE

12

旭 純子



手話とトータル・コミュニケーション
最近特に行う教育現場で「トータル・コミュニケーション」が注目されている。つまり、ろうあ者にとって手話指文字、口話、筆談のうち、いずれか一つの方法が生活上のすべての場面で有効とは言い切れないため、状況に応じてそれぞれを使い分けたり、併用している。これがまさにトータル・コミュニケーションのあり方なのであるし、その重要性は言うまでもないが、未就学や口話教育を受けていないため、手話以外に有効な伝達手段を持たない者もいる。それ故、やはり手話によるコミュニケーション保障は最重要課題であり、一般健聴者への手話の普及とあらゆる生活場面におけるきめ細かな手話通訳保障が不可欠である。

お知らせ

△サロン・あべのV四月の出会い

日時 昭和六三年四月一六日(土)

午後一時~四時

場所 育徳コミュニケーションセンター二階

研修室(スロープ・車イストイレ

有り。阿倍野区阪南町五十五

二八。地下鉄西田辺駅北西五分)

内容 「地域福祉——育て草の根」

講師 西 勝彦氏

(手話通訳有り)

会費 なし

問い合わせ先 ○六一六九一一〇二八。

富田 慶子

日々のよろこび添えて

△サロン・あべのVに贈るリ灯饰

一月のカンパ合計二〇〇〇円

ありがとうございました。

ニッティングサロン「友」ご案内

山本 篤 江

昨年の秋にもサロン紙に載せていただいた、ニッティングサロン「友」がふたたび、展示会を大々的に催すことになりました。

前回の展示会は、フクトク相互銀行さんの御厚意の物でしたが、今回の物は、教室発足十年の歩みとしての、記念すべき展示会です。一口に十年といっても、長かった

様で、短かった十年だったと思います。おこがましく、この文を書かせて貰っている

私は、教室が発足して三、四年たってから、お仲間に入れていただいたのですから、発

足当時のご苦勞を思うと頭が下がります。時には、生徒さんの人数よりスタッフの方が多かった日もありました。

教室のピーアールの意味でマクラメ編み、手編みの講習会もやりました。そのときの生徒さんも、来てくれます。今は、総勢十五、六人に増えなんとか展示会が、出

来るかなと言うところまで、がんばることが、出来ました。

生徒さん、一人一人の、汗と、根氣、執念の力作を、前回以上に、多くの人たちに見ていただければと思います、且つ講習会と同様に、ピーアールを兼ねて、させていただきます。

会場は、育徳コミュニケーションセンター二階の「ギャラリー育徳」で、日程は、五月九日から一週間開催します。ぜひ観に来て下さい。

定価の設定を

石田 律

第三種郵便物認可のことで、近畿郵政局業務企画課へ話を聞きに行った。

本紙も軌道に乗り、部数も増え定期読者への発送の簡便化と身障低料金第三種による送料経費節減のために近い将来、申請の方向へもって行く必要が出て来ている。

いろいろな申請条件があるなかのひとつに「定価」の設定がある。つまり、贈呈もしているが、定価販売もしているという形でない、無料配布オンリーでは認可の対象にはならないのである。ひとつの申請条件を満たす意味でも「定価」の設定をそろそろ考えた方がいいのでは…

編集後記



二月二〇日の例会で、国状こそ違え、共通しているのは、韓国もハワイも人の心は暖かく、障害者に対する対応・心づかいが、ごく自然に、さわやかであったと聞いた。例会のあと、目の不自由な人から「タクシーで自宅へ帰ったところ、最寄り駅近くで、無理矢理降ろされるので、タクシー会社の名前を聞いたが、答えもせず、走り去った」話を聞き、心寒い日本の現状に引き戻され、愕然とした。

(石)

<サロン・あべの>第21号

発行日 昭和63年 3月19日(土)

発行・編集<サロン・あべの>運営委員会

[大阪市阿倍野区阪南町6-3-26

電話(06)691-1028富田慶子]

印刷 セルフ社 電話(06)652-0337

[阿倍野区阿倍野筋4-18-19]